

# 異郷

寺田寅彦

青空文庫



## ウエルダアの桜

大きな河かと思うような細長い湖水を小蒸気で縦に渡って行った。古い地質時代にヨーロッパの北の半分を蔽っていた氷河が退いて行って、その跡に出来た砂原の窪みに水の溜ったのがこの湖とこれに連なる沢山の湖水だそうである。水は沈鬱に濁っている。変化の少ない周囲の地形の眺めも、到るところの黒い松林の眺めもいずれも沈鬱である。哲学の生れる国の自然にふさわしいと云った人の言葉を想い出させる。

船が着いてから小さな丘に上って行った。丘の頂には旗亭きていがある。その前の平地に沢山のテエブルと椅子が並べてあって、それがほとんど空席のないほど遊山ゆざんの客でいっぱいになっている。テエブルの上には琥珀こはくのように黄色いビイルと黒耀石のように黒いビイルのはいったコツプが並んで立っている。どちらを見ても異人ばかりである。それが私には分らない言葉で話している。

高い旗竿から八方に張り渡した繩にはいろいろの旗が並んで風に靡なびいている。その中に日の丸の旗のあるのが妙に目に立って見えた。

連れの日本人はその連れのドイツ女の青い上着を小脇にかかえて歩いてきた。私は自分の重い外套がいとうをかかえて黙つてその後をついて行つた。

丘を下りて桜の咲き乱れた畑地の中の径みちをあるいた。柔らかい砂地を踏みしめながらあるいているうちに、かつて経験した事のない不思議な心持になつて来た。それは軽く船に酔つたような心持であつた。そして鉛のように重いアパシイが全身を蔽うような気がした。美しい花の雲を見ていると眩暈めまいがして軽い吐気はきけをさえ催した。どんよりと吉野紙に包まれたような空の光も、浜辺のような白い砂地のががやきも、見るもののすべての上に灰色の悲しみが水の滲みるように拡がって行つた。

「あなたは どうして そんなに 悲し そう でしょう。」

連れの女はこう云つて聞いた。

「何も悲しき事はありません」と答える外はなかつた。実際何も悲しい事はなかつた。しかしまたすべてのものが悲しかつたのも事実である。それは自分が悲しいのでなくてむしろ周囲の世界の悲しみが自分のからだに滲み込んで来るように思われるのであつた。

これが郷愁ハイムウエーというものだとはその時には気が付かなかつた。

## ハルツの旅

地理学の学生の仲間にはいつて、ハルツを見に行つた。霧の深い朝であつた。霧が晴れかかつた時に、線路の横の畑の中に一疋の駄馬がしよんぼり立っているのが見えた。その馬のからだ一面から真白な蒸気が仰ぎょうさん山さんに立ち昇つていた。並んで坐つていた連れの男は「コロツサアル、コロツサアル」と呟つぶやいていた。私は何となしに笑いたくなくなつて声を出して笑つた。連れの男は何遍となく「コロツサアル」を繰返しては湯気の立つ馬をまじまじ眺めていた。

ウワルプルギスナハトには思つたような凄味せいみはなかつた。しかし思わない凄味せいみがどこかにあつた。お化けは居ないがヘクセンやエルフエンは居そうな気がした。ドクトル、ベエアマンはここで花崗岩の破れ目の出来方について講釈をして聞かせた。

あらかた葉をふるつたぶなの森の中を霧にしめつた落葉を踏みしめて歩いた。からだの弱そうなフロイラインWは重いリュクサククの紐に両手をかけて俯向きうつむがちに私の前を歩いていていた。ブルガリヤから来ているチンネフ君は、いろいろ日本の事を聞きたがつて私と並んで足を揃えて歩いた。聞かれてみると私は日本の事を何にも知らないのであつた。：

:

日暮れにツウム・ワイセン・ヒルシュという宿屋についた。食後にみんなが学生の唱歌を歌った。アフリカに行っていたドクトルMはズアヘリ土人の歌というものを歌って聞かせたが、それがどれだけ本当のものに似ているかそれは誰にも分らなかつた。日本の歌を聞かせろというので、仕方なしにピアノで君が代のメロディだけ弾いたら、誰かが大変悲しい感じがするではないかと云つた。

チンネフ君と一つの室に寝た。室には電燈も何もなかつた。蠟燭ろうそくを消したら真暗になつた。ひしひしと夜寒が身に沁みた。チンネフ君はベットに這入はいつてから永い間ゴソゴソ音を立てて動いていたが、それがどうしているのだから、異国人の自分にはどうしても想像が出来なかつた。

翌日はレエゲンシタインの古城を見に行つた。ただ一塊りの大きな岩山を切り刻んで出来たものである。何となしに鬼ヶ島を思わせた。囚しゅうりよ虜を幽閉したという深い井戸のような穴があつた。夜にでもなつたら古い昔のドイツ戦士の幻影がこの穴から出て来て、風雨に曝さらされた廢墟の上を駆け廻りそうな気がした。城の後ろは切り立てたような懸崖で深く見おろす直下には真黒なキイファアの森が、青ずんだ空気の底に黙り込んでいた。

「国の歴史や伝説やまたお伽話とぎばなしでもその国の自然を見た後でなければやっぱり本当には分らない。」誰かの云ったこんな言葉を思い出しながら、一行について岩山を下りた。

## アムステルダム

測候所を尋ねて場末の堀河に沿って歩いて行った。子供の時分に夢に見ていた古風な風景画の景色が到るところ眼前に拡がっていた。堀河にもやっている色々の船も、渋くはなやかに汚れた帆も、船頭のだぶだぶした服も、みんなロイスデエルやホベマ時代のヴェルニイがかつていた。

測候所で案内してくれた助手のB君は剽ひょうきん軽けいで元気のいい男であった。「この晴雨計の使い方を知っているかね、一つ測つて見給え」などと云った。別れ際に「ぜひ紹介したい人があるから今晚宅うちへ来てくれ」と云つて独りで勝手に約束をきめてしまった。

約束の時刻に尋ねて行った。入口で古風な呼鈴よびりんの紐を引くと、ひとりで戸があいた。狭い階段をいくつも上つていちばん高い所にB君の質素な家庭があった。二間ふたまただけの住居らしい。食堂兼応接間のようなところへ案内された。細君は食卓しょくじくに大きな筧ざるをのせて青い

莢さい隠いん元げんをむしっていた。

お茶を一杯よばれてから一緒に出かけて行った。とある町の小さな薬屋の店へ這はい入った。店には頭の禿げた肥った主人が居て、B君と二言三言話すと、私の方を見て、何か云ったがそれはオランダ語で私には分らなかった。

店のすぐ次の間に案内された。そこは細長い部屋で、やはり食堂兼応接間のようなものであったが、B君のうちのが侘わびしいほど無装飾であったのと反対に、ここは何かしらゴタゴタとうるさいほど飾り立てであった。

壁を見ると日本の錦絵が沢山貼りつけてある。いずれも明治年代に出来た俗な絵草紙である。天井の隅には拡げた日傘が吊してある。棚や煖だんろ炉の上には粗製の漆器や九くた谷たに焼やきなどが並べてある。中にはドイツ製の九谷まがいも交じっているようであった。

B氏は私の不審がつているのを面白そうに眺めるだけで、何の説明も与えてくれない。「まあ少し待ってくれ給え」と云っている。

奥の間からこの家の主婦が出て来た。髪が真黒で顔も西洋人にしてはかなり浅黒く、鼻立ちもほとんど日本人のようである。少しはにかんだような様子をして握手をした。しかし何も話さないで黙ってコオヒイを入れ始めた。



B君の説明によると、この主婦の亡父は航海者であったそうである。両親がたまたま横浜に来ていた時に生れたのがこの娘であった。しかしまだ物心もつかないうちに本国に帰ってしまったので、日本の記憶と云っては夢ほどにも残っていないが、ただ生れた土地と聞くだけで日本の国土に対するゼエンスフトを懐<sup>いだ</sup>いている。そしていつか一度日本人というものに会ってみたいと云っていた。それを知っているB君は、今日私を見ると、ちょうどいい獲物が掛かったと思つて連れて来たのである。

B君のこの仕方は、悪意に解釈すれば私にとつてあまり快くは思われない種類のものであつた。しかしこの人の剽軽で学者らしく無邪気な、そしてどこか親切な態度に馴れた私はその時でも少しも悪い心持は起らなかつた。そして遠い世界の果ての生れ故郷をなつかしがる人の心持も決して悪くは思えなかつた。

それにしても主婦の容貌があまり日本人によく似ているから、母親もオランダ人かと念のためにB君に聞いてみたが、やはりまぎれもない生<sup>きつすい</sup>粋のオランダ人だという事であつた。私は不思議な気がした。当人は人から日本人に似ていると云われるのを喜んでいるさうである。

主婦は奥の間から古ぼけた手帳のようなものを出して来た。それをあけて見ながら、何

かしら単語のようなものを切れ切れに読んで聞かせた。それは「コンニチワ」「オハヨオ」などというような種類のものであったが、あまり発音が変わっているから、はじめは日本語だとは気が付かないくらいであった。何だか聞きとれない言葉が出て来たので帳面を見せてもらおうと *fiots stas* と書いてある。「一つ」「二つ」という数のつもりであった。私は昔の日本の蘭学者のエレキテルなどというような言葉を思い出して覚えぬ微笑せずにはいられなかった。それから若干の単語の正しい発音を教えてやったりしたが、しかしこれはかえって教えたり正したりしないでそのままに承認してやった方がよいのではないかとも思ってみた。永い間胸に抱いてきた罪のない夢の国の美しい夢を冷たい現実でかき乱すのは気の毒で残酷なような気もするのであった。

(大正十一年十一月『明星』)

# 青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第二巻」岩波書店

1985（昭和60）年9月5日第3刷発行

初出：「明星 第二巻第六号」

1922（大正11）年11月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくつています。

※初出時の署名は「吉村冬彦」です。

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2006年10月16日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 異郷

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>